

# 平成30年度 まちづくりと公共交通対策特別委員会行政視察報告書

まちづくりと公共交通対策特別委員会  
委員長 村家 博

1 視察期間 平成30年10月25日(木)から10月26日(金)まで

2 視察先及び視察事項

(1) 10月25日(木) 鎌倉市

「SDGs 未来都市及び自治体SDGs モデル事業について」

「観光の足と市民生活の足を共存させる公共交通のあり方について」

(2) 10月26日(金) 小田原市

「地方再生コンパクトシティについて」

「地方都市への交流人口を増加させる公共交通のあり方について」

3 視察参加委員

委員長	村家	博
副委員長	松井	桂将
委員	岡部	享
〃	石森	正二
〃	上野	蛍
〃	押田	大祐
〃	高道	秋彦
〃	橋本	雅雄
〃	赤星	ゆかり
〃	有澤	守

4 随行職員

議事調査課長	福原	武
議事調査課主事	平瀬	航

## 5 視察概要

**10月25日（木）鎌倉市**

人口17万2千人／世帯数7万4千世帯／面積39.67km<sup>2</sup>

(H30.10.1時点)

### (1) 視察事項

- ・SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業について
- ・観光の足と市民生活の足を共存させる公共交通のあり方について

### (2) 視察の目的

- ・SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業について

SDGs（持続可能な開発目標）は、「誰一人取り残さない」社会の実現を目指して、平成27年9月に国連サミットで採択された2030年までに達成すべき社会全体の目標である。世界各国の市民や企業、行政が協力してSDGsに取り組んでいくことが求められており、中長期を見通した持続可能なまちづくりのためにも自治体によるSDGsの達成に向けた取組みが重要となっている。

富山市と同様に本年6月に内閣府から、SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業の選定を受けた鎌倉市の多様な取組みを視察し、今後の富山市の施策の参考とするもの。

- ・観光の足と市民生活の足を共存させる公共交通のあり方について

鎌倉市の公共交通機関には、日本国内のみならず、世界的にも有名な鉄道路線である江ノ島電鉄（江ノ電）がある。江ノ電は、市民生活に密着した電車であるとともに、多くの観光客が訪れる乗り物となっている。

富山市においても、市民生活を支えつつ観光客も満足させる公共交通が求められており、市民にも観光客にも愛されている江ノ電を視察し、今後の富山市の施策の参考とするもの。

### (3) 取組みの概要

- ・SDGs未来都市及び自治体SDGsモデル事業について

鎌倉市は、持続可能なまちの創造を目指し、市の最上位計画である総合計画に自治体SDGsの理念を掲げ、経済・社会・環境の三側面を好循環させる仕組みづくりに取り組んでいる。

経済面では、「働くまち鎌倉」、「住みたい・住み続けたいまち鎌倉」の実現を取組み課題とし、テレワークなどの新しいライフ・ワークスタイルの発信等に取り組むとともに、鎌倉に拠点を持つ企業、市役所、商工会議所など約20の団体が参画して地元の約30の店舗が週替わりでメニューを提供する「まちの社員食堂」などで、鎌倉で働く人々を応援している。

社会面では、市民自治の推進、共生社会の実現、長寿社会のまちづくりを取組み課題

とし、産学官民が共創する「鎌倉リビングラボ」の全市展開を推進することにより、地域住民が中心となってエリアマネジメントを進める手法の確立や、市民が地域課題や社会的課題を解決する仕組みづくりなどを進めている。

環境面では、自然・歴史・文化の継承、市民の安全な生活基盤づくりを取組み課題とし、史跡指定、保存管理、公有地化の推進、災害等からの保護による「歴史的遺産の保全」、古都保存法や景観法を活用した市街地の景観形成による「景観向上の促進」、渋滞対策のためのパーク&ライドや鎌倉ロードプライシングによる「人優先の交通環境の実現」などを目指している。

#### ・観光の足と市民生活の足を共存させる公共交通のあり方について

江ノ電は、早朝等を除き、電車の発着時刻に12分ごとのパターンダイヤを採用しており、初めて訪れる観光客にとっても毎日乗車する市民にとっても、駅に来る時間が非常にわかりやすいように設計されている。

片道34分間の乗車時間の中に15駅もあるため、通勤・通学はもとより、買い物などにも利用しやすく、市民生活を支える上で利便性の高い乗り物となっている。また、観光客にとっては、単なる移動のためだけの交通機関ではなく、車窓からの風景など列車そのものが一つの観光となっている面もある。

近年ますます増加傾向にある外国人観光客が快適に乗り降りできるように車内案内表示装置に英語、中国語、韓国語の3つの外国語を表示するのみならず、近隣の小学校に通う児童等にもわかりやすいようにひらがなのみの日本語表示も行うなど、乗客が利用しやすいように工夫が施されている。

#### (4) 所感

〔村家委員長〕

鎌倉市は17万人程度の人口で、富山県でいえば高岡市と同等規模の都市である。この市の住民5,000人程度の地区で、リビングラボと称した高齢者に向けた「長寿社会のまちづくり」プロジェクトを展開している。このプロジェクトは産学官民の四者が協力し合って、良質な居住環境づくりや健康・安心安全づくりなどを推進していくものである。このプロジェクトと従来の町内会システムの違いは、町内会であれば1年から2年で人材が代わっていくところをNPO法人が運営し、継続・持続可能なシステムを構築しているところである。富山市の町内会もなり手不足や高齢化が進んでおり、手本とすべき点が感じられた。

また、江ノ島電鉄も視察したが、乗客には周辺住民と観光客が見事に混在していた。富山市のライトレールもこのような賑わいとするため、何らかの施策を生み出していきたい。実現すれば恒常的な観光資源となり、富山市の発展に貢献するであろう。

〔松井桂将副委員長〕

鎌倉市は、神奈川県南東部に位置し、南は相模湾に面し、横浜・藤沢・逗子の3市に接する。気候も温暖で、自然と歴史遺産を抱える人口約17万2,000人が暮らす

清閑な住宅都市である。東京から電車で1時間ほどの鎌倉は、首都圏近郊の観光地として年間2,000万人以上が訪れ、市の面積1㎢当たりの入り込み客数は横浜の5倍、京都の8倍である。江ノ島電鉄は地域交通と観光交通を兼ねて利用されている。「働くまち鎌倉」に対し、市内企業に勤務する従業員を対象として空き家・空き店舗を利用した民間主導型での「まちの社員食堂」や「まちの社員寮」などを運営し、働きやすい環境に取り組んでおられた。「鎌倉」というブランド力は地域にとっては大きいと感じた。

〔岡部委員〕

鎌倉市は、東京から電車で1時間、横浜から30分であり、首都圏近郊の観光地として、年間2,000万人を超える観光客が訪れるまちで、人口は自然減を社会増が補い緩やかな自然減少の状態が続いている。平成28年3月に「鎌倉市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、若年層の流出を防ぐため「働くまち鎌倉」、「住みたい・住み続けたいまち鎌倉」の実現を目指し、人口減少を抑えるテレワークの推奨、慢性的な交通渋滞を解消するためロードプライシングの検討、ものづくりによる地域活性化など、持続可能な都市経営「SDGs未来都市かまくら」の創造を目指している。

〔石森委員〕

緑豊かな土地を多くの緑化推進団体が維持管理する活動や、リサイクル率50%前後など市民の環境にやさしい活動に特徴があると感じた。これまでのさまざまな蓄積を生かし総合計画の改定に当たり自治体SDGsの理念を掲げ、これまでの取組みを体系化、市民参加の改定を行い、経済・社会・環境が好循環する事業の重点化、わかりやすい目標を立て市職員のモチベーションを高めパートナーシップを発揮し、市民主体のまちづくりにつなげているなど各事業の見える化は富山市の事業展開の参考になった。

〔上野委員〕

「まちの社員食堂」は企業側の取組みが主体となっている。若年層の定住促進のためのテレワークの取組みを含め地域活性化や若者の交流に貢献していると感じた。リビングラボの取組みでは長寿社会のまちづくりとして産官学民が対等な立場で提案することや協力企業と実証実験から製品をつくり出していくのはまちの活性化につながる。観光客も多いなか、道路整備が中世から大きく変更できなかったことで発生している慢性的な交通渋滞解決に向けてロードプライシングの実施を検討中とのことで、その環境負荷の低減や交流促進結果・効果も注目していきたい。

〔押田委員〕

鎌倉市においては、まず「まちの社員食堂」のシステムを視察した。簡単に言えば、市内に企業などが集まって食堂を運営し、社員の福利厚生に努めるとともに、一般客にも開放し、町の魅力を高めていくことになる。このシステムをペーストして「まちの社員寮」というシステムも手がけるという。

「まちの……」のシステムは、私が住んでいる水橋地区にも適用できるのではないかと。

水橋地区は中小企業はあるが、昼食をとれる飲食店が極端に少なく、かといって各社で社員食堂を運営するには費用負担が大きすぎる。また、特産ともいえる地区産のコシヒカリや水橋漁港のホタルイカなど、地区にこだわることによって一般客や観光に波及することも期待できる。今回の視察で得た内容を精査し、地元商工会に先進事案として紹介して、地区の振興・発展に結びつけたいと思う。さらには、これをモデルケースとして、市内各地区に展開することも考えたい。

ここでは「江ノ電」にも乗車、視察した。鉄っちゃん・鉄子と言われる鉄道おたくではなく、純粹にレトロ感を満喫する観光客の多さに驚いた。さらにスーパーの買い物袋を持った主婦や小さな身体に大きなランドセルを背負った小学生も通学に利用していた。あと何年たてば、富山市の路面電車はこのような域に達するのだろうか。妙手はなく、市民に愛される交通機関であり続けるだけである。「地道」、この言葉しかないと思う。

#### 〔高道委員〕

鎌倉市の特徴の寺社、近代に建てられた和風・洋風の建築物などの歴史・文化、海や山などの自然が人々を魅了し年間2,000万人以上の観光客が訪れるまちであることが富山市と格段に違うと考えます。「SDGs未来都市かまくら」は、古都としての風格を保ちながら、生きる喜びと新しい魅力を創造するまちで地域資本の好循環をすることで地域経済の活性化が図られます。「働くまち鎌倉」「住みたい・住み続けたいまち鎌倉」は、人口減少を少しでも食い止めたいのは富山市と共通ではありますが、違う角度で視察でき、今後の参考にしたい。

#### 〔橋本委員〕

鎌倉市は、古都保存法を制定している。SDGs未来都市としての取組みのなかで、古都としての風格を保ちながら、生きる喜びと新しい魅力を創造するまちを目指している。

昭和初期建築の歴史的建造物である「村上邸」は、地域のランドマークであるとともに、保存すべき環境そのものでもある。これを「環境」「経済」「社会」の三側面をつなぐ地域資本と位置づけ、その効果を可視化、鎌倉SDGsショーケースとしてPRしている。

本市においても、歴史的建造物は多数存在している。今回の視察を参考にして、最大限の活用法を考えたい。

#### 〔赤星委員〕

市の最上位計画である鎌倉市総合計画（基本計画）に自治体SDGsの理念を掲げ、現行計画のすべての事業をSDGsの視点から再点検することは重要と思う。総合計画に人権の尊重が掲げられていることもSDGsのNo.16「平和と公正をすべての人に」の目標に合致している。鎌倉の歴史や文化を大切にしつつ、「Fab City宣言」でものづくりによる地域活性化、市内で働く人のため「まちの社員食堂」など、多

様で新しいことに挑戦する人たちが集まり、柔軟な発想でまちを魅力的にする仕掛けづくりが面白い。議会の会派は最大3人会派が6つ、一般質問は一人1回2時間以内にも注目。

〔有澤委員〕

「働くまち鎌倉」「住みたい・住み続けたいまち鎌倉」を目指し、若年層の流出に歯止めをかけるため、新たな産業振興施策としてテレワークの推奨や企業進出の支援を行っている。市民生活を守り、来訪者も快適に過ごせる環境づくりに取り組み、環境負荷を減らし、交流促進、地域活性化を目指している。

教育環境の充実を掲げ、日本初となる「F a b C i t y宣言」を行い、ものづくりによる地域活性化を進めている。

また、高齢化率45%の今泉台住宅団地をモデル地区とし良質な居住環境、買い物生活支援、交通環境の充実など住民が主体になり、行政、企業、大学（東大）が連携し、鎌倉リビングラボと称した活動を展開し、「長寿社会のまちづくり」に取り組んでいた。まさに持続可能な都市経営と言えるのではないか。

鎌倉は東京駅から約50km、横浜駅から約20kmと、都内や横浜市のベッドタウンであり、住民生活の足の確保、観光客にも利用されている公共交通が充実していた。古都の風情を感じることができる首都圏近郊の観光地ではあるが、交通渋滞等の懸念は払拭すべきと思った。

10月26日（金）小田原市

人口19万1千人／世帯数8万1千世帯／面積113.81km<sup>2</sup>

(H30.10.1時点)

(1) 視察事項

- ・地方再生コンパクトシティについて
- ・地方都市への交流人口を増加させる公共交通のあり方について

(2) 視察の目的

- ・地方再生コンパクトシティについて

小田原市は、平成30年3月に国土交通省と内閣府から地方再生コンパクトシティのモデル都市に選定された。地方再生コンパクトシティとは、人口減少や地域経済縮小などの課題を抱える地方都市において、都市のコンパクト化や拠点地域の形成を図るとともに、官民連携の推進や地域資源の活用により、地域の稼ぐ力の向上に積極的に取り組む都市である。

富山市は、公共交通を軸とした拠点集中型のコンパクトなまちづくりを進めており、小田原市の多様な取組みを視察し、今後の富山市の施策の参考とするもの。

- ・地方都市への交流人口を増加させる公共交通のあり方について

小田原市は、鉄道が6路線あり、小田急ロマンスカーなどの魅力的な電車も発着する交通至便な街で、多くの観光客が訪れている。春・夏・秋の行楽シーズンには、小田原市内の観光名所等を回遊するバスとして、小田原宿観光回遊バス「うめまる号」が運行されている。

地方都市において、交流人口を増加させるためにも公共交通のあり方は重要となっており、小田原市における取組みを視察し、今後の富山市の施策の参考とするもの。

(3) 取組みの概要

- ・地方再生コンパクトシティについて

小田原市は、小田原「駅・城」で地域の集客力をアップし、板橋・南町地区の「邸園の文化」で交流空間を拡大し、早川地区の「漁港・一夜城」まで広がる観光交流を促進し、「地域の稼ぐ力」を高めることにより、交流の拡大と空き家・空き店舗の解消など地域活性化を図る賑わいと交流のコンパクトシティを目指している。

商業施設、公共施設、ホテル等のお城通り地区再開発、小田原城址等の整備、多様な文化交流と回遊性を生み出す市民ホールの整備を行うとともに、回遊動線を強化する歩道整備、レンタサイクル、回遊バス事業等により、小田原「駅・城」を中心とした賑わいの創出に取り組んでいる。

明治時代の政財界人などの邸宅の活用、地域団体との協力による回遊空間づくり、民間とのマッチングによる歴史的建造物の店舗等への活用により、板橋・南町地区の観光交流の促進と地域の活性化を図っている。

地域の協議会等による取組みを支援し、空き家・空き店舗の利活用や景観形成のルー

ルづくり、道路の美装化など、公民連携で地域の自立と活性化を図り、まちなか再生による住みよい地域づくりを進めている。

・地方都市への交流人口を増加させる公共交通のあり方について

小田原市にはJR東海道本線や小田急小田原線など6路線が乗り入れている、市内に18の鉄道駅があり、公共交通の至便性に優れている。

小田急ロマンスカーは、多様なニーズに合わせて進化しており、大型1枚ガラスの展望席前面窓や車体側面の高さ1mの連続窓など車窓から沿線の風景を楽しむ工夫がなされているとともに、各座席にコンセント、肘掛収納型のテーブル、デッキの足元照明、オストメイト、ベビーシート、温水洗浄機能付き便座、点字案内付き手すりなど、人に優しく快適な設備で安心して利用できるように配慮されている。

小田原宿観光回遊バス「うめまる号」は、小田原駅から一夜城歴史公園、小田原漁港、かまぼこ通り等の観光名所をめぐるのみならず、小田原文学館、市民会館等の公共施設も巡回していて、観光客も市民も気軽に利用できる乗り物となっている。1個500円の乗車証バッジを購入して提示すると、各シーズン中は乗り放題で利用できるほか、協力店や協力施設による各種特典も受けられる。また、前シーズンのバッジを提示すれば、割引料金（1個300円）が適用されるなど、利用促進のための工夫がなされている。一周約50分のルートで一日11便運行しており、平成29年は春・夏・秋で68日間運行し、一日平均252人に利用されている。特に春の桜の季節は一日平均319人も利用するほど需要が多いため、その時期は平日も毎日運行するなど、柔軟な運用がなされている。

#### （４）所感

〔村家委員長〕

小田原市では、歴史的資源を通じた賑わいと交流のコンパクトシティの形成プランを視察した。これは駅と城を中心とし、旧家の住居跡が存在するコンパクトシティを連続、拡大し、商圈や観光圏を形成するものである。

富山市は小田原市ほどの歴史的遺産を持ち合わせてはいないが、コンパクトシティを先んじて推進してきた実績がある。まちなかを中心に置き、国道41号や旧8号、また環状道路沿いをいま一度公共交通をもって再点検、再整備し、これまで以上に市民にとって住みやすい環境へと変貌させていくことが肝要であると感じる。

〔松井桂将副委員長〕

小田原市は東京都内から新幹線利用で30分、小田急線利用で70分から90分と利便性の高い土地に豊かな自然と歴史的資源を通じた賑わいと活気ある交流空間を目指す人口約19万1,000人が暮らす都市である。「小田原提灯」の発祥の地でもある。

小田原駅周辺の都市機能の整備・充実によりまちなかの居住環境を整え、箱根板橋駅周辺の観光交流促進により魅力的でコンパクトなまちの形成を目指している。小田原城址や板橋・南町地区の歴史的建造物を民間で利活用し、観光回遊バス運行事業やレンタ

サイクル事業を利用して観光交流の促進と地域の活性化を図り、年間610万人の来訪者を受け入れている。回遊バスの路線の一部は地域のコミュニティバスとしての役割を果たしている。

〔岡部委員〕

小田原市では生産人口の減少と高齢者が増加することが見込まれることから、中心市街地と生活圏を支える各拠点が公共交通で結ばれ、将来にわたって誰もが暮らしやすく、都市の活力が持続的に確保されるコンパクトシティの実現を目指している。具体的には、小田原城址公園を中心とした小田原駅周辺地区、明治大正期の実業家の別邸をはじめ歴史的・文化的建造物が多く残る箱根板橋駅周辺地区、小田原漁港や石垣山一夜城歴史公園地区を観光と交流の場として整備を進めている。春・夏・秋の土日祝日には各シーズン500円で乗り放題のバスを運行している。

〔石森委員〕

歴史的建造物が非常に多く、「にぎわいと交流のまち」を創り出すため、建造物の保全・活用を民間活力で最大限に生かすとともに、公有化の検討も含め推進している。観光の中心である小田原城址公園の園路整備・屋外灯設置・無電柱化などの整備により快適な都市空間を創出し、にぎわいと交流のまちづくりを図っている。このような事業により商店街の空き店舗の増加を減少トレンドに反転させる効果を目指している。回遊動線を強化する歩道整備、レンタサイクル・回遊バス事業など観光客誘致による賑わいを創出することを目指しており富山市とは若干思惑は違うが、現状の資源の活用は参考になる。

〔上野委員〕

歴史的な建築物を多く所有する城下町ならではの取組みだった。一部地区では地元地区街づくり協議会が作成した基準でデザイン調整がされていることや、駅付近のアーケードも城下町を意識してつくられており、統一感のある街並みとなっていた。文化的な資源を活用すること、アクセスをよくすることでまちづくりとしてだけでなく、観光としても魅力向上につながる。また駅も多く、公共交通が発達していることで公共交通の沿線への居住誘導の取組みやコンパクトで効率的な都市となることで地域の活性化や住民の利便性向上につながるのではないかと。

〔押田委員〕

小田原市では、歴史遺産を活かしたコンパクトシティ構想を伺った。特に知りたかったのは「箱根駅伝」のコースとしての観光PRである。伺ってわかったのは、往路と復路では観光客の入り込みに差があること、往路しかビジネスにならないらしい。これは選手たちが通過する時刻によるものだ。であれば、往路でいかにもてなし、リピーターの獲得に努めるしかないのである。

富山市においても、2泊連泊は厳しい。いかにリピートしてもらおうか。四季折々の旬

を楽しんでいただく施策など、知恵を絞らねばならない。

その点、小田原には小田急ロマンスカーがある。東京新宿から90分程度で「快適」に移動できる強みはある。富山では、あいの風とやま鉄道に石川・富山・福井・新潟が連携する「特別列車」を運行させるのも手であろう。「費用が……」と手をこまねいていると観光客は他地区に取られるばかりだ。迅速に対応していくべきと考える。

#### 〔高道委員〕

小田原市の歴史的資源を通じた賑わいと交流のコンパクトシティの形成は、観光による集客力アップに伴い、地域交流の拡大、観光交流の促進で「地域の稼ぐ力」を高めることとしています。地域DMOが中心となって地域の魅力を発信、新たな事業の提案を行い民間事業者と連携し、商店街の空き店舗を減少トレンドに反転するなど、うまく成果を上げています。また、多極ネットワーク型コンパクトシティとして都市機能誘導区域の範囲の設定をすることで地域性と機能的特徴を基に拠点が設けられています。富山市における串と団子の団子区域の地域創生の参考にしたい。

#### 〔橋本委員〕

小田原市は、歴史的資源を通じた賑わいと交流のコンパクトシティの形成を目指す。小田原駅・城で地域の集客力アップ、邸園の文化で交流空間を拡大、漁港・一夜城まで広がる観光交流の促進で、地域の稼ぐ力を高めている。

事業のひとつに「地域のなりわい、まちなか再生支援」がある。地域の協議会等による取り組みを支援し、空き家・空き店舗の利活用や景観形成のルールづくり等、公民連携で地域の自立と活性化を図り、まちなか再生による住みよい地域づくりを進める。本市においても、商店街の空き店舗の増加が課題である。参考にしたい。

#### 〔赤星委員〕

小田原「駅・城」で地域の集客力アップ、板橋・南町地区の「邸園の文化」で交流空間を拡大、早川地区の「漁港・一夜城」まで広がる観光交流の促進で「地域の稼ぐ力」を高めていくという計画は、もともとコンパクトな市域で、かまぼこ通りや銀座竹の花通りなどの商店街、小田原城址公園や明治期の政財界要人の別邸など歴史的な資源が豊富にあるエリアごとの特徴を活かし、小田原駅に降り立つ人の回遊性を高めようという計画で有効に感じた。小田原城は天守内部が美術館博物館のようにリニューアルされていて、見る側にとっては快適だった。

#### 〔有澤委員〕

小田原市の地方再生コンパクトシティは、平成30年3月に国土交通省の選定を受け国の支援のもと行われている。平成30年度から平成32年度までの3年間の事業である。3年間の総額は39.3億円で、そのうち交付要望は19.3億円で、今年度の交付要望は7.8億円である。地元企業（万葉倶楽部）が事業主体でお城通り地区再開発、小田原城址等の整備、多様な文化交流を生み出す市民ホールの整備等、小田原駅・

城を中心とした賑わい創出に取り組む計画である。

また、かまぼこ通りや銀座竹の花通りの空き家・空き店舗を活用し活性化させるとのことであり、民間とのマッチングを進め、5年後には空き店舗「0」を目指すとのことである。非常に興味を持ったが、今は調査中とのことである。

小田原駅は鉄道5路線が乗り入れ、新幹線で東京駅から30分と交通環境に恵まれている。国道1号（旧東海道）の交流空間を利用したり、小田原城をはじめ、著名人の別邸等、歴史的建造物を観光化し、これらを回遊させ、何度も訪れたいくなる小田原の賑わいを創出し、首都圏はもちろん、全国からの交流人口増を目指している。この事業が民間主体で行われていることに驚いた。

平成30年10月25日（木）鎌倉市



平成30年10月26日（金）小田原市

